



いなほ

5

青山学院大学馬術部

目次

はじめに部長	土田三千雄	1
第十七回国体岡山大会に関する報告主将	伊藤正昭	2
全日本に出場して	柴田克彦	2
努十七回国休出場援助資金会計報告会計	石田謙三	3
在米会長のスケッチ	青木昇	4
「いななき」 四号発刊後から		
今日に至るまで		5
馬糞の中の青春		8
高倉 彰		
菊地由美子		
飯田和之		



〈新人紹介〉どうぞよろしく……………12

中西紀子 稲熊武臣 篠原敬明 山田恵道

那波広和 秋永倫子 谷中 基美 小野口 健

S U B J E C T ……………17

昭和三十七年度緑鞍会総会報告……………27

緑鞍会報告……………28

B B 会 紹 介……………29

成長しつつある高等部馬術同好会……………30

馬匹報告……………32

先輩寄稿 「RECOLLECTION」……………33

東雄三郎 菅原紀美枝 鎌田和正 脇坂達雄

植松英二 沈廻浜 宮坂悠二 米谷清志

編 集 後 記……………47



「はじめに」

部長 土田三千雄

馬術部は数ある運動部の中で最も健全な歩みを続けてきた部の一つであると、思います。戦後馬術部の復興と殆んど同時に部に関係を持つことになり、今日まで続いてきたのでこれはかなり長い因縁であると思います。

はじめはすいぶん苦しくて二頭か三頭の馬さえ養ってやってゆけるかと心配でした。その上、馬場の問題ではいつも嫌われ、いじめられました。それにもかかわらず今日のような隆盛に達した原動力は、緑鞍会であり、その心棒の青木会長であります。それなくばとても今日はない。

馬術部の集りに時々行くことは、私としては楽しいことの一つです。我が家のようにびとという感じがするからです。

いま新しい馬場の週辺の町の方々と学院当局との間で色々な話し合いが進められています。大切な御隣家のことですからどうか双方により解決を致していただきたい。これが差当つての課題です。

それからアメリカ力の青木会長も今年あたりは元気で帰ってきてもらいたいものです。

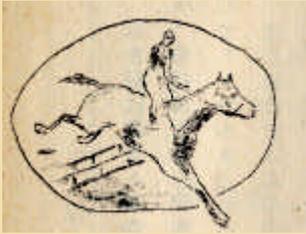
第17回国体岡山大会に関する報告

主将 伊藤 正昭

(国体中障碍出場)

国体出場、それは我々部長が一丸となつて、耕やし、種を散ぎ、育くみ、実らせた成果であつた。もちろん、それには、諸先輩の、間接、直接の多大の御援助が強力な肥料となつていたからこそ、我々がこの果実を味わう事が今日可能なのである。この紙上を借りて先輩各位に深く感謝の意を表すると共に以下簡単なる御報告を申し上げます。

我々が東京を發つたのは、青渚を岡山へ輸送した二日後の十月十八日であつた。運賃の節約の爲め、



農大、中央の二頭と積み込んだ爲め、多少苦しうであつたが尚一層苦しうなのは輸送使役の部員であつた。これには副馬匹の塩川を充て、馬匹管理の万全を計つたが、不幸にも輸送中前肢跛行の悲運に直面した。岡山

ではこれが回復の爲、一日、中川に乗り入れ、医師よ、薬よと努力を重ねたが、確たる原因をつかめぬまま試合にのぞんだのである。結果は中障碍で一準、六段一完飛の不調に終つたが、もし調子が良かったならばと我々の悔根少なからざるものであつた。

以上の如く、残念乍ら先輩及び部員各位の援助、御努力にもかかわらず、良い成績を納められなかつた事を心からおわび申し上げますと共に、これを薬に、来年こそはこの願望を必ず実現すべく、日夜精進、研究に勉める事をお約束致します。

同時に先輩方より一層の御鞭撻、御助言の程を切にお願い申し上げます。

伊藤君は今大会に於て中障碍に呉竹(パレス)に出場し、優勝の栄冠を飾り、後、全馬術で三位の好成績を納めました。

全日本に出場して 柴田 克彦

(全日本六段出場)

全天、一点の曇りもない岡山の空に、ひるがえる国体

旗。

厳しく、困難だった東京都予選を幸運にも通過し、晴れの大会に初めて出場出来た感激がこみ上げてきた。さすがに日本各地の優勝が集められているだけに、東京で優勝したといえども、上位成績を収める事は安易な事ではなかった。その上、慣れない貨車輸送の為めか青渚に故障をきたし、期間中に復調させたいと懸命に手当したにもかかわらず不調のまま大会を終始し、自分としても今一步の全力を出しきれなかったのが、無念と云うより他に言葉がない。

全日本の六段にも、二完飛の後、三度目飛越の第五で拒止するような失策を犯してしまった。しかし不調とはいえ互角に戦い得た青渚の調教の成功と、部員全員と、諸先輩の協力、援助が突って、大会に参加できたという事が、試合に残せなかった功績より、大きな収穫だと思いい、今では小さな満足を感じています。

第十七回国体出場援助資金会計報告

会計 石田謙三

第十七回国体出場に關しまして、緑鞍会その他からの多大の援助を戴きました事を深く感謝致します。

第17回国体岡山遠征費用概算

収入の部		支出の部	
緑鞍会援助金	50,000	貨車輸送費(往復)	18,481
学院当局援助金	20,000	馬具車輸送受(往復)	10,000
連盟補助金	8,000	輸送者旅費	16,630
その他補助		馬匹費	15,575
		(薬品蹟医費	7,190
		馬糧費	4,185
		移動証明他	2,080
		備品費	12,050
		雑費	6,406
		(御礼	2,800
		連絡通借費	1,806
		渋谷駅馬匹仮泊料	1,800
収入合計	78,000	支出合計	76,942
		残金	1,058
	78,000		78,000

以下はその収支の会計報告の概略であります。
なお、出発に際してロ・プその他の援助を緑鞍会々員渡辺孝子さんから受け、備品費の節減に寄与していただきました事を御報告申し上げます。

在米会長のスケッチ

青木昇（昭和16年卒）

緑鞆会々長であり、また馬術部を今日まで育成せられた功労者である青木真次氏が、此の度社命により米国日石へ榮転せられ、四月二十四日十日日航機で羽田を後にされた。

今さら氏の功績を云々するのは如何かと思われるが、年々新しい緑鞆会々員が力強く社会人の一員として入会される今日、氏の片鱗を述べ、今後の諸兄のそれぞれの場合に於ける努力の指標にでもなれば幸と思ひ、敢えて御伝える次第である。

氏は昭和四年青山学院高等商業学部を卒業せられたのであるが、学生時代は関東選手として勇名を馳せ、馬術部のみならず、学院の名譽の爲めに大いに奮闘された。私共の学生時代は、非常に残念乍らそのようを成果を納めることが出来ず、上級生の各位から、昔の馬術部は斯くと、青木先輩の頃の繁榮振りを拝聴したものである。おそらく上級生各位もまた先輩から、そのように奮起を促されたものと思う。

氏は卒業後日石へ入社せられ、優秀な社員として、学

院の精神とスポーツマンシップを以つて、衆望を集められたことは当然である。軍隊は騎兵に入隊せられ、関東選手腕を存分振るわれたことは想像に難くない。大戦中は要務に就かれ、南方を転々されたように拝聴している。戦後、日石に戻られ、榮進して仕入部長となられ今日に及ばれた。

戦前戦中は会社の御都合や、軍務の爲め在京せられた期間は極く短かく、私達の年代の者は醫咳に接する機会が無かつたが、戦後馬術部の復興と共に、内藤先輩と御二人で多忙な中から、精神的に経済的に多大な援助を続けられ、今日の馬術部の盛況を見るに至つたのである。

戦後困難を時代に、復興に情熱を傾けた当時の学生諸兄の努力もさること乍ら、時には明日の馬糧がなく、練習馬に事欠くような時、馬房、馬湯等の問題で学校との間に困難が生じた時など、常に学生と共に心配せられ、多大の援助を惜しまれなかつたことは、戦後の学生諸兄には、どの期に於ても記憶に残つて居られることと思ふ。

その外卒業部員の就職に東奔西走せられたり、仲人を

勤められたり、吾子の如く配慮せられる様を見て、氏の馬術部と部員に対する愛情には敬服する次第である。

またO・B会を組織し、後に今日の緑鞍会と改組し、O・B・O・Gの懇親に務められ、内藤会長の後を継ぎ、何かと卒業生の面倒も見て来られた。O・Bと云つても私達ですら二十年、青木会長は三十数年前の卒業生である。ジエネレーションにも相当の開きがあり、ものゝ従え方、考え方も、若い人達とは自ずと違いがある筈で、普通の人では、容易に年代の相違を埋めて、共に話し合うことは困難である。

然し御年輩にも拘わらず、常に新鮮で若い人達を理解し、今日の息吹を身に附けて居られるあたり、見習うべきだと自省している。

去る三月十三日緑鞍会主催で、有楽町八ピ丁にて会長送別のレセプションが開かれたが、席上内藤先輩より、線鞍会の青木会長と云うより、青木会長あつての緑鞍会であり、青木会長のない緑鞍会は考えられない。故に会長は在米のまゝ帰朝せらるゝまで、緑鞍会を皆で守つていくことにしてはとの発言があり、満場一致可決、青木会長の絶つての辞退にも拘わらず、在米会長を御引受け願つた。私も氏が渡米せらるゝを耳にした時、密かに緑

鞍会のことを案じ、再度内藤先輩に会長を御願ひするの
も申訳ない。かと云つて内藤、青木両先輩なしでは、大
黒柱のない家に等しい。さりとてこゝまで続いた線鞍会
を瓦解させられない。私は私なりに思ひい悩んでいたと
ころ、内藤先輩の名提案によつて、会長は在米せられて
も、精神的支柱として在京せられることゝなつた。

会長が晴れて帰朝せらるゝまで、会員各位は緑鞍会の
発展に団結して当り、現役馬術部の良きアドバイザーた
らんことを御願ひする次第である。本誌を借り、特に戦
前御卒業の緑鞍会々員には、御多忙とは存じますが、昔
日の現役時代を回顧せられ、今後一層の御援助下されん
ことを切望致します。

末筆乍ら、会長には異境の他にあつて、健康に充分留
意せられ、一日も早く御帰還せられんことを、会員一同
にて祈念し、この稿を終りとす。

「いななき」四号発刊から

今日に至るまで

先輩の皆様と、私達現役との間の、唯一の機関紙であ
る「いななき」が、ここ一年以上も休刊となつてしまひ、
大変申し訳なく、思つております。今日ここに「いななき

き」五号を、先輩の皆様にお送りするにあたって、こ
こ一年あまりの部生活を思いだしながら、御報告いたし
たいと思います。

「いななき」四号が発刊されてから、まもなく、将来
を期待されていた育剣号が腰の故障が直らず、やむなく
離脱いたしました。

そのすなおな性格は誰からも愛され、一年を経た今日
でも、時々青剣の名は、私達の話題にのびります。故障
馬は、出さなければ、やっていけないという、学生の部
生活のさびしさを、この時ばかりは、ほんとうに、しみ
じみとかみしめました。が、十一月に入り、先輩の方々
の御協力と、パーティ、バイト等の努力が実って、二頭
の新馬を購入出来、いれ代りに青麗号を横浜乗馬クラブ
に売却いたしました。試合の方では、十二月のアバロン
大会で一ヶ月前にやってきた青慧号に平木コーチが騎乗、
婦人障害で満点でゴールされ、平木コーチの熱心な調教
の結果とはいえ、私達一同全く驚嘆いたしました。現役
は、一向にふるわず、対立大戦にも大敗を見ましたが、
女子は関東女子馬術選手権で馬場・障碍共に優勝、関東
北女子学生馬術大会で、団体、個人あわせて優勝とめざ

ましい活躍を記録いたしました。

新年には、多数のOB・OGのおいでをいただき、例
年のごとく初乗会。先輩と、私達現役とが、一緒になっ
て、共に馬と交わる、年に一度のこのなごやかな行事が
終わりますと、綱島での最もつらい月、寒い寒い二月がや
つてきます。春の試合にそなえての、春休み返上の強化
練習が続ぎ、桜のつぼみも、ほころんできた三月、男子
は関西遠征へと旅立ち、女子は下旬に、初の試合であつ
た関東女子自馬大会で総合二位を納めました。

五月には、都民大会で、平木コーチが貸与馬で優勝さ
れ、関東選手選抜には伊藤君が出場し、障害で優勝を飾
りました。

六月の東京大会は、不調に終わりましたが、女子自馬馬
場馬術では、その年の暮、出願しました青光号が乙馬場
を踏み、二位の成績を得ました。

何ひとつ日影のない綱島の馬場に、夏が訪づれますと、
炎天下にさらされて草薙りが始まります。鎌を持って、
草薙りとばかり、いさみこんでも、私達女子は、カマサ
バキもいたって鈍く、わづかな協力しか出来ませんでし
たが、男子の人達の努力で、馬房の天井いっぱいには冬の
ための乾草が用意されました。七月に男子は水沢で、女

子は八月も終る項、大室高原で合宿し、いよいよスポーツの秋を迎えます。九月に入るや、国体、全日本の予選が行われ、中障者・六段の二種目で優勝となり、東京都代表として、国体に参加することになりました。十月も下旬となって、国体が開幕されるという一週間ほどまえ、大勢の見送る中で青渚号は、先輩より送られた真新し「ヤケイロクをつけて、夜の渋谷を出発しました。大変好調といわれていましたのに、はじめての、なれない長旅に足を悪くした青渚は期待した力も出しきれず、好成績をあげることは出来ませんでした。国体参加に際し、先輩の皆様の暖かい御協力と御援助をここにあらためて感謝いたします。

暦も十一月をめくるようになりますと、綱島はすっかり冬を感じさせず。馬房のまわりの一面の枯すすきは、夕日の中で美しく銀色になびきます。下旬には、アバロン大会がありました。現役は、それといった成績もあげられませんでしたが、平木コーチが、青武号で婦人サンジョルジュに出場なさいました。思えば、前の年の丁度、アバロン大会の近づく頃、入厩した新馬がサンジョルシュに出場すること、そのことさえ、驚くべきことですのに、それで堂々と優勝を勝ち得たことは、私達の喜びは

もちろん、他校の、また馬術界の注目をあつめたのも当然だったと思います。

しかし、一年余りの新馬が優勝とさわがれたその日の朝、前の年の同じ日に入厩したもう一頭の新馬、しかもその年のアバロン大会では婦人障害を満点でゴールした新馬、青慧号が、青木会長より寄贈された青光号と一諸に廃馬となって出ていったのです。

ずい分苦しいことも多い部ですが、馬術部の生活の中で、馬をださねばならない時ほど私達にとって、わびしく、心苦しい時はありません。あの動物特有の直感的な目で悟りきつたように見つめられても、私達には返す言葉がないのですから。

使えなくなつた馬を養つておくほどの余裕のない私達にとって、ほかにどうするすべもないのですから。

この二頭の代りに、すぐに二頭新馬を購入いたしました。

また十二月に入ると、納会が品川の観光ホテルにて、にぎやかにおこなわれ例年にくらべ、女の方の先輩が少ないような感じで、何か寂しい気がいたしました。なごやかなうちに楽しい時間をすごしました。十二月もおしせまつてから、全国王座・王者決定戦がありました。

関東代表に農工大を送った私達他校の面々は、選ばれた者同志の活躍に目をみはるのみでした。王者決定戦には部からも伊藤君が関東選手として出場しましたが、惜しくも破れました。

新しい年を迎えるとすぐ、男子は立教戦、九大学リーグ戦、女子は学習院戦を控え、強化練習に入ります。綱島の冬は、殊の外きびしく、特に九年来の寒波とやらは馬場にも容赦なくやってきます。夜もまだ明けやらぬ肌をきるよう寒さの中で、長靴の中の足は感覚をまったく失います。でもそんな朝には、冷たく透明にすみわたった空気の中に、判でおしたように鮮やかに富士山の姿を見ることが出来るのです。一月十五日は午前中、立教戦、つづいて初乗会をいたしました。立教戦は、新入戦では破れましたが、レギュラーで、挽回することが出来、初乗会は例年通りなごやかに終わりましたが、私達のいたらなさで先輩の方々には、何かと不行届の点が多く目につかれたことと存じせず。ここに、つつしんでおわびいたします。

さて翌日の十六日及び十七日は、関東九大学リーグ戦が行われ、優勝は成城となりましたが、昨年関東代表となった農工大を破り二位の好成績をあげました。

また試験もいよいよせまった下旬には綱島の馬場に於て、女子の対学習院戦がありました。めずらしくからりと晴れわたったすばらしいお天気の日曜日でしたが、私達一同、大敗に終り、練習不足と気力のなさをつくづく反省させられました。三月には男子関西遠征、下旬には女子の自馬大会とスケジュールが待っています。女子一同、今度の大敗を心にかみしめ、三月の試合にまた同じ反省をくり返さないようがんばるつもりです。

(伊 沢 記)

馬糞の中の青春

高 倉 彰

(昭和37年卒)

「目標はデカイ方がいい。よし！一番の成績で卒業してやれ。今思うと馬鹿な事を考えたものだ、苦笑している。この目標は、水泡の如く、はかなく消えてしまつたが、卒業した今もつともつと素晴らしい貴重なものを沢山得て、卒業できた喜びにひたっている。それが無形のものであるだけに、余計貴重に感じられる。とにかく、馬術部に入つて良かった。」

誰にも負けないほど、安易な気持ちで入部し、「こいつあ大変だ」と気づいた時には、すでに、馬の匂いが身体いっぱいに浸み込んでいた。

「ええい、仕方がねえや。一丁やったるか」ってんで、それから、馬、馬、馬ですごし、最初にたてた目標は馬糞と共に、どこかへ棄ててしまった。勿論、障害はあった。父の反対である。だが、こんなものはクソ食らえであった。

雨、風、雪の中の練習、上級生には怒鳴られ、棒で叩かれる。やっと練習が終ると、今度は馬に噛まれる。蹴られる。何度もやめようと思った。然し、こういう中で、何か眼に見えないものが私に植えつけられていった。そして蹴られても、噛まれても、馬を愛し、部を愛するようになった。そして女の子も……。

馬糞の中で、馬糞を肥料として、私ほ成長していた。一夜中、馬と雨の中を歩いたり、馬を買ったために借金に苦しみ、夢の中に馬糧屋が請求書を持って現われた事もあった。

女の子に、恋愛の相談を受けて慰さめたり、一諸に悩んだりして、三枚目の悲哀をかこち、自らも二枚目になるうと努力したこともあった。大雪の元旦に当番をし、

先輩の誕生日と新年を祝して飲んだビールのうまかったこと、飲みすぎて吐いたりした事も、一度ならずあった。二夜も貨車で揺られたり、遠く仙台で草刈りをしたり、東京の真只中皇居で野宿した事もあった。その他いろいろな事が懐しく走馬灯のように思い出される。こうして過ごした四年間は、決して楽な道ではなかった。楽しい事も沢山あった。然し苦しい事の方が多かった。だがその若しかった事こそ、自分が一人前の人間として、成長していくための、重要な糧となってくれたと信じている。一つの障害を乗り越えるたびに得る喜びが、私を励まし自信を与えてくれた。

障害を見ると逃避する事ばかり考えていた私が、今ではそれに体当りして行くうとするほどに変わった。部はこんなにまで私にしてくれた。私は部にとって、決して満点の人間ではないだろう。然し私は、私なりにその時その時に、ベストをつくしてきたつもりだ。そして、今私の心には、ベストを尽くした後の喜びが充滿している。部が主で、学問が従となってしまうが、全然悔いていない。授業では学ぶ事のできないものを、沢山享受できたからだ。私の青春時代を語る時、この、馬糞の中の青春は、その大部分を占めるだろう。

この四年間を語るアルバムを開いてみると、部に無関係な写真は、五、六枚しかない。とにかく馬術部一色に、いろいろとられている。然し最後のページをくつて、アルバムを閉じた時「これで良かったんだ」と言う言葉が自ずと口の端に出てくる。そしてしみじみと感ずる。

「馬術部に入つて良かった」と。

菊地 由美子

（昭和三七年卒）

「石の上にも三年」と、良く言いますね。馬術部は、真に「馬の上にも四年」でした。決して楽なものではありませんでした。辛かったことの方が、どんなに多かったです。もつと楽しく、自分にも納得のいく目的を掴み得るものも、私達学生の生活の中にはある筈です。周囲を見て「あらなさい。何だか自分が馬鹿に思えてくる時がありますね。馬術部で何が目的なのか、馬が自分に何の関係があるのかと。誰だつて何かを求めますね。その若いエネルギーを馬に賭ける とにかくやってみましょう。馬術部に入つたその目的……. それをものぞいたつて見つかるとはありません。目的を何に持つつかと言つことより過程を大切にして下さい。目的は、

四年間やつて見ることに、それです。ですから四年間続けなくては目的も、何も、得られないと思います。何でも一つのことを学生生活四年間（或は二年間）の内にやつて見ようと言う気があるなら、貴女は馬術部へ入つたのですから、それをやり通して「あらなさい。自分の力を試す場として一年一年の過程を大切にしたい」と思っています。環境に甘えすぎると次の努力は、並大抵のものではありませんから。幸いにも四年間苦しみに耐えてやり通した者にとつて、馬術部は、忘れることの出来ない心のふるさとです。私達はそうでした。今になると納得のゆかなかつたことも、辛かったことも皆、馬術部と私の間では、壊しい大切な思い出が、あるようです。そして四年間を共にした同級生は、本当に長い友人であると思つております。下叔生の皆様の一人一人が、四年後の卒業に際して、「馬術部について良かった。」と言える私のこの感激と同じものであることを信じます。

飯田 和之

卒業振り返つてみる時、「ああ、部に入つて本当に良かった。」とつくづく思います。特に、私の様に学校に於け

る授業に最後迄興味の持てなかつた者にとって、部生活は唯一の生き甲斐であつた、といつても過言ではないでしょう。こうして眠を閉じて考えていると、楽しかつた事、苦しかつた事がありありと臉に浮かんできます。そして、自分がこれから生きようとする人生に与えた大きな影響、又、現在こうして在る事に対する不思議な運命の絆を感じずにはいられせん。

同時に、私の脳裏をかすめるのは、自分が本当にベストを尽して部生活を週こしたか、という疑問です。丁度馬場の移転やら馬匹の交換等部にとって大きな、而も大切な転換期にあつた時、自分の無能力も然ること乍ら、努力の足りなかつた事が反省されてなりません。それは自分自身を鍛錬々摩し、又、それと同時に後輩を牽引するという努力の事です。

私は、運動部らしい、組織化された規律正しい、然も豪放な部を念願しておりました。又、その様な部になつてこそ、試合に於いても立派な成績を残す事が出来るのではないのでしょうか。

そこで、皆様にお願ひがあります。勿論、人間一人一人性格が異なる様に、考え方もさまざまでしょうが、父は子に、先輩は後輩にと、自分の実現出来なかつた夢を

託すのが世の常であり、誠に身勝手なことですがお許し下さい。即ち、抽象的になりますが、部の方針ないし目的を確立し、それを十分認識して欲しい事です。その下に、部員一致団結し、努力して欲しいのです。同じ目的意識の下に集る同好の士に取つて、練習や当番、宿直等をサボル等ということは論外の事ではないでしょうか。

もし、そういう方が居たら部をやめるよう話してやるべきでしょう。何故をら、当人に取つて、ダラダラした義務感のみの世界から抜け出る事により、新しい、生き甲斐のある、充実した生活が開けることが可能だからです。勿論、人間である以上、それが緊張の連続であつてはやつて行ける筈がありません。現在、部が持つている和氣得々とした雰囲気は大切にすべきですし、飲む会、ダベリソグ、遠乗りと云う様に、リラックスするということの一つの重要な事です。特に、上級鮭は、その兼ね合いを考へてあげなくてはいけません。騒ぐ時は心から打ち溶けて騒ぎ、練習や仕事の時には一生懸命に努力する事です。

何だか説教じみてしまいましたが、私は、この青山学院の馬術部が立派をものになり、皆様が悔いのない、充実した学生生活を送られる事を、心から祈つて居ります。

どうぞよろしく

新人紹介

長い間、いななき、休刊となり、その間入った新入生もこの四月で一年を迎えます。そのうち、何人かは既に残念ながら、退部しましたが、現在男子7名、女子4名、全員はりきって練習しております。先輩の方々どうぞよろしく。

中西 紀子（仏1）

本当のところ、馬術部へ入った動機は、馬術というのがとっても素適に聞えたからです。前からあこがれていて、やっとかなったのですが、綱島の馬場に行つて、何とも言えないにいをかいだとたんに老えが変りました。今ではあのおいが好きなくらいです。私は、今までに運動系のクラブには、入ったことがなかったので、何でもものめずらしく又、わからないことがあつたりして、自分ではわからないところで失敗していることが

多くあるかもしれません。でも、運動系のクラブのふんい気は、とても住みこちがよろしいです。うわざには、ずい分きびしいと聞いていました。でも、きびしい中におもしろい事があつたりして、一人で、にやりと笑つたりすることもあります。そして、馬術部の方は皆親切でおもしろい方ばかりで部室なんかで会うと、自然とお口のアたりがゆるんできてしまいます。

まだ、馬がこわくて世話をする時をど、足に気をつけたり、かまればはしないかと馬の口をちらりちらりとやりながらやっているのか、かえって時間がかかってしまいます。いつ頃までに、おなじみになれますかしら。

でも、何と言いましても早く、カウボーイならぬ、ホースガールになって、荒野を愛馬と共に、走らせたいものです。

始めて馬に乗った時

稲熊 武臣（経1）

始めて馬に乗ったのである。全くの壮快なのだ。四方千山の中万草の縁、増々強し……おっとこれは少し誇張に過ぎるが、馬上で眼を閉じれば、そんな気持なのである。馬に乗る者、馬を引く者、そして駆けるもの。山

にいだかれ、野を走る。風は春の香りに満ち、雲は、我と共に走る。

彼方より来る人、その人の唇は薄く紅をさし、春の日に眉は汗ばむ。そして、おお！このときめき、彼の人のほほは、そつとくずれたのだ。

その時 ああ 無情なるかな、人の声。“下馬”。まさに「春宵一刻價千金なり」。

一度は坐折しそつになつたけど

篠原敬明

春まだ眠りからさめぬ静けさの中、ここだけが活気に満ちている。遠くには紺碧の空に映える富士頂上には雪をいただき、この綱島グラウンドを見降している。今日も青山学院大学馬術部の練習が始まるのだ。

朝五時半の起床は確かにつらい。いつも八時に起き、朝食もそこそこに学校へかけつけていたこの僕にこんな事は一体出来るだろうか。しか四時にさえ起きる人がいると聞いて、そんな泣事など言っていられないと思ひ入部の決心をしたのである。

しつかり握つた手綱が汗ばんでくる。しかし胸は踊る。夢にまで見た馬に乗れることの楽しさ、嬉しさは僕をい

ささか興奮させたが、しかし先輩のきびしい愛のむちが飛ぶ。「前を見る」「返事をしろ」「もつと歩かせろ」これは僕が初めて綱島馬場へ行つた時の事である。こんな事は初めてで、とまどつた。

綱島は、急行こそ止まるが全くの田舎である。行く道には、田畑あり河あり気の早いかえるが鳴く事さえある。その河を渡つたた向こう側が馬場である。馬はそれぞれ、独自の持ち味があり、僕はどの馬も好きだ。馬には、それぞれのかせがある。月雪の「かむ」かせ、青渚の「け」かせ、それを早く知つて広い野原を走つてみたい。馬術部はただ馬に乗るだけではない。馬に乗ることは、もちろんだが、普段の手入、飼つけに到るまで、十分な注意を要する。雨の日など特にこれが強要されることなどが僕にもわかつてきた。一度は坐折しそつになつた僕を励ましてくれた先輩のため僕も僕は頑張る。

デリケートで可愛い動物

山田恵道

幸運にも栄ある青山学院に入学出来又大いなる希望を持つて伝統ある馬術部に入部出来嬉しく思いました。僕は高校生時代に馬術部に籍を置き、暇な折には馬の背に

過し、三年間の内におのずとわいて来た馬というデリケートで可愛い動物に対する愛着にひかれ、引き続き青山学院大学体育会馬術部といういかめしいこの部に入部しましたが、高校の時とはまるつきり異ったシステムと練習にいささか面喰らつてしまいました。強化練習と名がつけば一日たりとも休む事の出来ない期間そして朝早い練習にはねむけまなこをこすり馬場へ通う。高校の時の様にのんびりとした練習とは全然異り、自ずと気分を一新せざるを得ません。しかしこつこつと敵しい柵を乗り越えてこそ、以前に「大学生は何故か上手だなあ。」と思つていた憧れが、達成出来るのだと思えばフアイトがわいて来ます。そして入部案内のハソフレットの様に家庭的で、良い先輩に沢山恵まれ、馬術部以外の面でも色々教えていただき嬉しく思っています。もう一つ嬉しい事に自分達で可愛かれる僕達の馬が、七頭も綱島の馬場に毎朝僕達を待つている事です。三年間いつも願望していた事が、この馬術部で達せられたのです。手入れ中に喫まれる事もあり……細かな神経も使わねばならず、練習中にも背の上でボソヤリしていると振り落すかも知れない彼等ですが、練習が終り鞍をはずして、いっしょに田んぼ道を草を食べさせながら、今の練習の苦し

かつた事、楽しかつた事を答えもしない彼と話しながら散歩する時等、日に日に増々馬が好きになつて行く思いです。そしてこれから最小四年間先輩。同僚そして愛すべき七頭の彼等と、楽しく学生生活を過したいと切望しています。

雨の中でつぶぬれになつても

那波 広和

春風に乗ってブーンと臭ってくる独特の香り、ここは綱島にある総合グラウンドの一角青山学院大学馬術部の練習場。僕は大学の入学式を済ませる前に、この練習場を訪れ馬術部に入部した。それだけ馬術部に憧れていたのである。僕の乗馬の経験は中等部の頃に少し有るだけで、その頃にいた馬は全然覚え、自分の見知らぬ馬ばかりだったので何か寂しい感じもしないではなかつた。学校が始まつてから続々入部して来た人達。その人達を見て皆経験もあり、うまそうな人ばかりに見えこれはよほど頑張らなきゃあと思つた。先輩も皆親切で（もつとも練習中は、皆恐ろしいけれど）愉快な人達？ばかりで大変楽しい。しかし全部が楽しい訳ではない。練習にしても、シーズン・オフのない一年中の練習。又雨や雪さらに嵐の

中での練習 人馬ともずぶぬれである。それに練習時間が、朝六時半から〃という事である。しかし右に述べた様を事を克服してこそ、実るのである。一生懸命がんばるつもりである。

厳しい規律の中で

秋 永 倫 子 (商1)

昨年の夏軽井沢の高原で浅間の噴煙を背景にさつそうと走る乗馬姿の人達を見て、乗馬とは何んとすばらしいものであるうと思った。大学に入学して、馬術部に入部したものの、朝は暗い中に起きて練習に行き、午後の練習のある時は夜る八時過ぎにくたくたになって家路をたどる、疲れ果てて勉強どころか倒れる様に寝てしまふ。今まで運動と言つても高等部の時にテニスをした位の私には、運動部と云う所の親律の厳しさ、礼儀正しさ、上級生の下級生に対する態度、その他すべて興味深く学ぶ所が多い。そばに近寄るのも恐かつた馬も馴れるにしたがつて、だんだんと愛情が湧き世話するのが楽しみにさえなる。

戸惑つことも辛い事も随分あるけれど、これも私にとつて肉体的にも、精神的にも、良い試練となり、修業と

なることと思う。

「手入れ七分 乗り三分」の言葉に魅せられて

谷 中 基 兼

「大学生活を有意義に過そう」。これは新人生の誰れもが考える事かも知れませんが、私も入学式その日から、常にそればかり思つておりました。

有意義に過ごすには何かの部に入る、私の場合は、高校時代に陸上競技部の主将をしていた事もあつたり、運動をする事が飯よりも好きであつたりしたから、運動部に入ろうと考えていました。

第一日に部室で先輩達に、話を聞かせてもらいその日家に帰り学友会のしおりを開いて見た時「手入れ七分に乗り三分」と言葉に私は、

強くひかれました。今の

世界はインスタント時代で、何から何までオートメーション化されています。この時代に、「手入れ七分に乗り三分」の文には魅せられずにはいられ



ませんでした。

私は四年間、常に体育会の馬術部の部員である事を念頭におき、有意義な学生生活を送ろうと心から願っております。

心と心

小野 口 健

我々の周囲に草花がなかったら、そして動物がいなかったら、我々の生活はどんなにうるおいの乏しいものになってしまうであろう。ことに、小鳥・犬・猫のような小さな動物は、そのまゝ我々の生きた友たちのような感じさせします。昔から今まで、そして世界中のどの国でも幼い子供たちの童話の中に、どんなに多くの動物たちが登場したことであろう。そうした童話の世界は別としても、動物たちはやはり我々のよい心の友であることには変わりありません。物語の中の動物のように口こそききませんが、心と心とは自から通いあい我々のやさしい愛情に、親しい動作をもつてこたえてくれます。動物の中でも殊に、馬（おとなしい馬は別として）は、絶対と

いっていくらいい心と心が通じ合わないと、自分の思う様には動いてくれません。よく馬に乗っている人を見

ると、いかにも簡単そうに見えますが、実際に乗ってみて感じたことですが、自分の思う様に動いてくれないし、だからといって、やけをおこすと、かえって暴れだしておさまりがつかなくなってしまう。それはやはり、心と心が通い合いあっていないからだと思えます。心と心が通い合うためには、いつも手入れをし、馬に馴れ、馬に信頼感を与えられることです。そうすれば、自然と人馬一体となった立派な競技が出来ると思えます。まだ馬術のことはあまりよくわかりませんが、たゞ一つわかったことは、簡単なようで、非常にむずかしいということです。それ故に、一通りマスターしたときを思うと、一層ファイトがわいてきます。



「障碍飛越の要領」

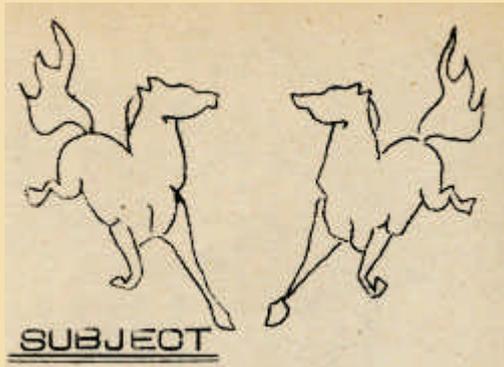
(1)

今村安氏著

伊太利方式による

「障碍飛越の要領とその調教」より

順序としてまず



馬の態勢、騎手の

姿勢、飛越要領を

述べる。勿論すべ

ての馬が、斯の如

き現況になつて居

らぬから、直にこ

の通り実施しよう

としても無理かも

知れぬ。斯の如く

馬を作り、騎手の

姿勢を整えること

が、大切である。馬術の名人は、調教の名人であるとい

える。長く調教して、思う通り乗りてまわすのであつて、

曲垣平九郎といえども、全然仕込んでない馬で、馬術の

奥義を即座に行つとは出来ない。

(1) 馬の態勢

頭頸は低きを要す。障碍を飛ぶためには、馬がその障

碍を充分に見ることが必要である。元來馬は飛んだり

ねたりする動物である。低い障碍等は馬自身で勝手に飛

越するのである。人は唯、馬の運動を妨害しない様に、

ついておればよいのである。

顔が高いと、馬は足許を、よく見ることが出来ない。

従つて馬が正しく障碍を見、踏切りを考へることが出来

ない。これではいかな名馬も障碍を飛ぶ事は出来ない。

頭頸は、飛越にあたり、非常に大切な役目をする。即ち

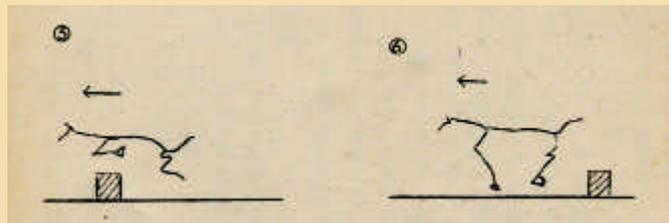
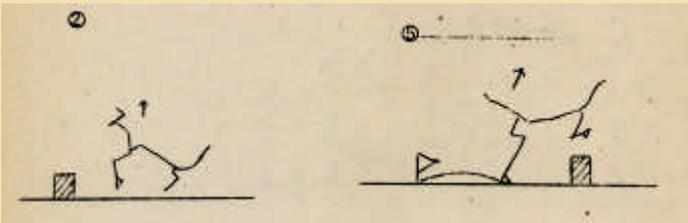
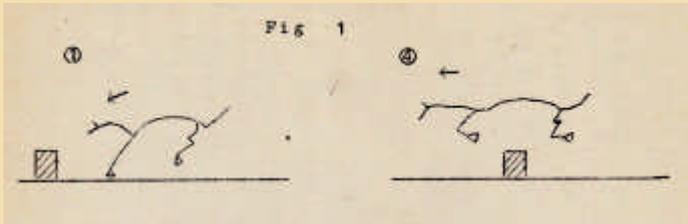
障碍直前で、障碍を熟視すると、ともに、これを下げ、

前肢で踏切ると同時に頭を起し、其反撞で馬体を上に跳

ね上げる。次で後肢の踏切で馬体が全く空中に飛躍する

此の時頭頸を前方に投擲することく伸し、飛越を容易な

Fig 1



らしめる。着地に当りては、稍々高起して、前駆着地の反撞を和げ、次で直に前方伸し、平衡をとること第一図に示すが如し。

頭頸を高起せしむるの不利

夫れなら頭頸を高くしたら何故悪いか。飛越に際してのみ低下せしめれば良いではないかの疑問が起るかもしれぬ。馬が地上を見る為には頭を高く保持するより頭を低くし眼高を低下した方が有利なることは、説明を要しない。助足踏切の判断をなすためには、障碍の遠く前方より下を見るのが、必要である。又、障碍は一箇と限定されたものではない。更に野外騎乗には、何時何処に障碍が有するか不明である。即ち常に足許を注視しながら行進することが必要である。又馬の踏込みはどちらが良いかと考えて見るに頭を高めれば第二図の如く、背骨は下方に歪曲し、肢は、外方に開くのである。頭を低めれば、第三図の如く、背骨は上方に歪曲し、肢は内方に這入つて来る。従つて後者の方が、自然踏込がよいのは明瞭である。或は言ふ頭頸の高起は、馬を収縮せしめ、後肢の踏込に關連して、前駆起揚し頭を高むるのである。之を關係起揚という。故に頭を高くするは、踏込みよき

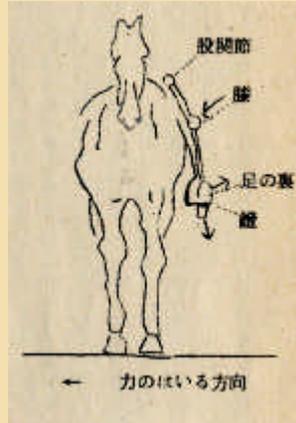
証なりと。然りの収縮馬術の根元である。然し収縮馬術は馬場運動を実施するに、都合がよいので、野外を駆使したり、障碍を飛越するには、不適當なのである。又斯かる姿勢は、調教技術の優秀と、馬格の優良と、相俟つて初めて出来るので、第四図に示す如く馬の頸、背、援推に亘り屈撓せしめなければならぬ、事實一般の乗馬の中に斯かる態勢の馬が、何頭あるか、大抵は単に頭を高く上るを以て屈撓せりと誤解する結果前記第二図のようになつていたのである。

収縮屈撓をせしめざること。即ち馬の姿勢は、頭頸を低下し、自然の儘の伸々とした姿勢でなければならぬ。決して収縮や屈撓を要求しては不可なのである。

□向：□向は從順でなければならぬのは申す迄もなき事乍ら、馬が衝に支点を採つて居る事が必要である。馬場馬術では後躯を重心下に踏込ませ、体重を後躯に移し、前躯を起揚せしめるのである。従つて前躯は軽く馬は手綱に重つては不可なのである。飛越ではこれと反対に、人馬の重心は前躯に集まり後躯は前方に、推進せしむるに役立たせる。而して、頭頸を伸し衝に支点を採る。即ち手綱に重なつて来るのである。

拳には、或程度の手応があるのがよい。

fig 5



之を要するに、馬の姿勢は特に、顧慮することはない。即ち収縮屈撓せしめることなく、頭頸は自然に伸し、且衝に支点をとっておればよい。他の事は一切馬め思う様に任せるのである。斯くすれば、馬は馬自身、人を負担し諸作業を行ふに最も具合のよい姿勢をとるのである。決して殊更に人が姿勢を作つては不可ない。

(2) 騎手の姿勢

元來馬は、其の体重を、前軀に余計掛けて居る。後軀は負重よりも、推進を掌るのである。馬の負担力の一番強い所は、申の部であり、一番弱い所は腰である。故に人が乗つたが為、此の關係を著しく変化せしむるは、適當でない。即ち、人も成る可く馬の重心と一致すれば、馬は最も平衡保持が容易なのである。に体重がかかる様にし、上体を、少々前傾せしむるのである。上体を垂直に保ち両坐骨上に体重を掛けるが如きは重心を、後方に落し、且つ馬の腰を押しつける事に成り、不適當である。斯くては、馬は思う様に運動をし得ない。両坐骨に体重を掛けるのは不可ない。むしろ之を浮かす様に、体重は自分の両膝に落ちる様に心掛けるとよろしい。要するに、馬の運動を妨害しないようにすることが大切

である。頭は軟和にして、顎を出し、遠くを見ること。決して下を見ない様にする。前方一点を見る必要ない。四方をみまわすがよい。拳は腕と共に疑り無く概ねの上附近に位置せしむるか、の両側に位置するがよい。只馬の口と絶えず、接触を保つ事が必要である。即ち馬が口を出したら、拳を出してやる。決して無暗に張つてはいけない。引張ると頭が高くなる。拳ば手綱を通して馬の口と連絡するものである。手綱は緩むことなく又引張ることなく、常に徴張さして置く事が必要である。此の様にして色々な地形を各種歩度で行進して居れば、自然に馬は衝に支点を求めて来る。拳は固定すべからず、「常に馬の口に追隨する」ことが必要である。

騎座……上体は和はらく前傾するのであるから、騎

座も坐骨を浮かせ、膝で固定する様になる。而して膝は充分に低下して、深く堅確に鞍に接し、固定するを要す。脚は自然に垂れ、脚の上部と膝で堅確なる騎座を構成するのである。従つて、脚の下部は、馬腹から離すようにする。而して、踵を充分に、踏下げる事が、絶対に必要である。踵が下ることにより、脚がよく閉まるのである。足尖の方向等は、どうでもいい。足の裏を外に向ける様にするのである。鐙の長度は、堅確なる騎座を作る上に最も大切な事で、長すぎてはいけない。稍短かくし、出

来る丈深く足を突込んで、充分に体重をかけるのである。而して鐙の外側を踏み、踏鞞の余端は内側に残すのである。第五図の如し。斯くて膝以下は鐙により、確かりと固定され、行進間も障碍飛越間も常に同じ姿勢で居るのである。故にその長度は膝を確かり緊め尻を浮かし、鐙上に立上つた時、丁度よく膝以下が固定し、且斯かる姿勢にて、速歩駈歩等各種の運動が出来るように短かくするのである。障碍飛越の野外不斉地等に於ける姿勢は唯である。

即ち尻を挙げ、鐙に立つた型である。此の姿勢が、總ての基礎である故、いつでもこの姿勢をとり得る様、又此の姿勢を持続して各種の運動が出来得る様、練習する必要がある。最初の中は腰が疲れるが、是非之れだけは、練習しなければならぬ。

(3) 飛越の要領

馬の姿勢と騎手の基本の姿勢とが出来て居れば、飛越は何でもない。即ち、馬に一切をまかせて人は馬におくれないように、ついていさえすればよい。之が為には、馬が好んで障碍に向う様に訓練すべきである。それにはまず馬が、各種の低障害をよく見ながら、横へそれることなく、速歩で通過させる。

通過の要領は障碍前から腰を挙げて鐙に立ち下を見ない様にして、誘導する。それで通過し終るまでこの姿勢を保持すればよい。

飛越も全く之と同様で駈歩で障碍前から鐙に立ち障碍物の中央に誘導する。そして膝を閉め何時馬が飛んでもよい様に準備する。この時障碍に向かわんが為、拍車を入れたり、無暗に脚や鞭を使つてはいけない。騎手が、無理に推進する時は、馬は興奮するばかりで踏切を考えた走を工夫する余地がなく、却て沈静をかき、決断を誤るのである。只馬にまかせ、障碍に近くなる程膝を閉めつけていくのである。それでどんどん向つていくように馬をならしておくのである。拍車等も殊更に鋭いものを用いる必要はない。

馬が踏切つて飛越したら、馬の口に従つて、拳を前に出すのである。此の際、たづなを、だらりとゆるめてしまつのはよくない。馬は衝、すなわち拳に支点をとつて、飛んでいるのであるから緩めすぎると、却て平衡がとれなくなり、全身の緊張を欠いてくる。勿論、拳で馬の口に當つたり、引張ることは絶対禁物で、引張つたりしたら、飛ぶ馬も嫌つて、とばなくなつてしまつ。ひつばるよりも、むしろ、緩めすぎた方が害はない。

「馬術の格言と逆説」

Alessandro Alvisi 著

「馬術の格言と逆説」より

馬術熟達の第一原則 騎手の扶助を制限し、単純にし、更にこれを……除外すること。

常に同様の……極めて軽い…… 連絡を馬と保つこと。

これが最も肝要で最も困難なことである。

良騎座の極意は柔軟性と只好機に当たつてのみ巧に力を用いることにある。

手綱を引けば身を支え得ると思つのは、妄想である。私が拳で転倒を防ぎ得たことは、一回もない。むしろ拳は馬から運動の自由を、奪うから、しばしば人馬転倒を容易ならしめる。このことは私が四百回転倒して四百回立証し得たところである。

着地の時も又同じで、そのままの姿勢を保つておればよい。此の時上体がおけると、尻が落ち、馬背に激突するから、後れないことが肝要 又連続障碍等の時は、その姿勢のまま、ただちに、他の障碍に向つのである。即ち、騎手の姿勢は、初めから終りまで全く同一である。常に尻が拳つているから、尻で馬の後軀を押える事も無し、馬は人の股間で自由な姿勢で、思う様にとぶことが出来る。此の際、下を向かない事が大切で、下を向くと上体が前のめりになり、又前進氣勢を削ぎ馬が停止することがある。常に前方遠くを、見るべきである。又連続して障碍がある時は、次の障碍の方を見、飛越後の経路誘導を、考へるべきである。野外騎乗に於ても又、然りて、終始鐙の上に立つたまま、思う経路に馬を誘導する。腰を上げておれば、馬は騎手の妨害をつけることなく、地形、地物に応じ之に順応して、姿勢を採つて行進し、騎手も膝の部分のみで、馬についているのであるから、馬が如何な姿勢をとろうが、何等影響がない、至極楽である。即ち障害物でも、不斉地でも心配なく平気で駆馳し得るのである。

騎手はその心を練りこれを強くせねばならぬこれによつて頭を拳から独立せしめることが出来る。

馬は決して馬鹿ではない。然し鋭敏に過ぎたるためにその才智が麻痺していることが、余りにしばしばある。

とは云え馬は人よりも、聡明であるといひ得よう。即ち彼はあらゆる国語の人々を常によく理解する。人が単に両脚をもつて意を通じるのみであるに拘らず⁶⁶。

人が馬を理解するよりも、馬が人を理解する方が早くて詳しいとは妙言である。

馬は動物中で最も傲慢である。即ちその主人に対してさえも媚びへつらわない、又彼は、最も儀礼正しい動物である。即ち、未知の人にさえも不機嫌でない。馬にとつては、両者同一である。

馬術は支配技術を練りこれを完成するものである。即ち、己が馬を支配するために、永続不断的の練習を行うのが馬術である。

人間の勇気を立証するものとして何と価値あるもの

……馬！

騎手は、自ら先ずその恐怖克服の自信を、十分に持たぬ限り、馬の恐怖を克服し得ると考えてはならぬ。

拙い騎手が人目をごまかして、難事を免れんとするのを阻む証人が只一人いる。それは馬である。

騎手は馬が、うまく行つてくれないと怒る前に、一度主客の位置をかえて、自分が肩に子馬を背負つて試験をうけると、想像して見る必要がある。そして尚一度よく考へ直して見るがよい。

落馬で、一切を、会得するということはないが、然し何物をも字ばぬということもない。

馬はどの馬も常に馬である。騎手は常に必ずしも騎手ではない。

馬を悪くする騎手があり、騎手をよくする馬がある。

よく乗りこなされた馬は、考へる四本の肢である。

馬と騎手との間に、尊敬がない限り、愛情はない。

正しい騎坐に於ける膝の固定は、決して、圧迫を意味するものではない。人は運行中の乗合自動車の手すりに、決して固く身を支持してはいない。只必要な瞬間に鈍りつくのみである。(然して手すりは馬の腰や後肢の如く常に荷重圧力を受けていることは一度もない。) 鍔の機能はこの手すりと同様である。

危険に面した場合、それが現に、現われたものであると、万一あり得ると思われるものであろうと、騎手が硬く緊張して、しっかりと力をいれて居れば、馬を静止せしめ得ると考へてはならぬ。逆に自身を寛に自由にするより他に途はない。騎手が硬くなれば、馬もこれに応じ、恰も両者共、不安なるかの如き印象を持つ。

騎手と馬との間のつながりは、手綱による二つの意志の正しい接触とでも定義し得ようか。即ち二つの神経系統、あるいは、むしろ二つの筋肉系統のそれといった方がよいかも知れない。この接触が失せた時は、騎手は脚の扶助によって、再びこれを、取り戻すのである。

脚を以つて騎手は、馬へのつながりを取り戻し、これ

を正しく保つ。これこそ前進決意が一方から他方へ伝わる軌道である。

馬は手綱によって、騎手に支点を見出す。この逆は不可である。

騎手に対する手綱の用は、馬に運動方向、手衛支持、停止を示すにとまる。

手衛は騎手の意志を伝える非常に細い針金である。もしこれを過度に張る時は、これは支持の役も果すが、これは決して手綱本来の役目ではない。もしこれが弛み過ぎた時は、その存在の意義を失う。電流回路は中断せられるのである。

騎手、手中の手綱の動きは、極めてわづかでないならばならぬ。恰も両端が折れて短くなつたハンドルで自転車を操縦するが如くである。

口の鋭敏な馬はその口に落してはならない一枚の木の葉をくわえていると想像すべきである。あるいは、かか

る馬は砂糖の糸で編んだ固い帯で導かれていると心得るべきである。

騎手の両拳は馬の前駆に、両脚はその後駆にはたらく。

馬は自動車と同じく、前進駆動を騎手の両足から受ける。

馬の横腹は鍵盤であり、その感度は後へ行く程大きくなる。騎手はこの上で足を以て曲を奏するのである。

方向変換に於て馬体は管の如く曲る。その一端は馬頭であり、他端は騎手の外側脚の踵である。その中央は内側脚の踵にある。

よき騎手は、自身及びその馬をよく知る心理学者である。然し又一方に於て、彼は馬の医者である。もし取扱いを誤れば疾病はますます悪化する。即ち、過誤は大きくなる。総ての馬にあてはまる方法というものはない。恰も、総ての生徒に対してこれがないと同様である。飛越に際しては、馬にその主人さえも忘れて、自由勝

手に障害物を飛んでいるという錯覚を起さしめるがよい。騎手は馬の自負心に信頼してよいだろう。

騎手は障害物を注意深く観察するのが常である。少くとも、馬にも同じことをする権利を与えるべきである。然して手綱をゆるめ、(犬の引綱を馳める如く)以てその頸を前に伸さしめるべきである。

馬にも人にも同様のことがある。能力と成績とは、しはしは正反対になる。天才が、健康な普通人よりも、しはしは業績の劣ることがあり、同様にして普通の馬が経験とよき調教とを、身につけた場合には、著しく好成绩を挙げ得る。非凡な馬は、最も困難なる障害物を、半メートルも高く飛躍せるくせに、しかも最も容易なものを、拒否する。

子馬の馴致や教育は人間の場合よりも、短期に終る、だから、人間は決して短気をおこしてはならない。

騎手は馬に物事を諒解すために、時と可能手段とを与えねばならぬということをまずもって、自ら諒解すべ

きである。騎手自身が、自分の馬をよく諒解しないで、馬に物事を早く、よく理解するようにと、要求してはならぬ。

昭和三十七年度緑鞍会総会報告

日時 昭和三十七年十月十七日 午後六時

場所 青山学院校友会館集合室

出席者 青木昇、羽坂勇司、沈迺浜、米谷浩志

藤根成、東雄三郎、福原美里、村野吉昌、

大島孝子、庄司光行、佐藤一貫、上原光

代、小池信夫、遠藤共輝、張問睦途、

五十嵐豊子、木田美恵子、堤義則、岡良

介、細内宏、飯田和之

他現役幹部

定刻青木会長代理より、会長渡米、その他幹事の連絡不手際によれ、総会が例年の五月に出来なかつた事のおわびのあいさつにより総会は開かれた。議題にある昭和三十六年度の活動報告については、初乗会後、五月に、青山学院~~高等部~~食堂に於て、総会を開催、八月に會員の寄附により、馬匹購入（総額六万四千元）十二月に銀

座、白馬車にて懇親会開催、昭和三十七年一月初乗会を馬事公苑にて開いた。尚昭和三十七年五月青木会長が会社の都合上、渡米することになり、四月にその送別会を開いた事を報告次いで別表の通りの昭和三十六年度予算に対する決算の報告が出され、全員これを了承した。

次いで幹事改選に移り、今年度は、會員も増えたことでもあり、又もつとこの会の緊密を図るため、幹事を増加させてはとの意見が出て、昨年度幹事の青木会長（据置）青木昇会長代理、沈、福原、内藤、小池、上原、岩崎氏が再選、村野（監督）、木田、岡、菊地の四氏が幹事に決定した。

次いで、新役員により、新年度の事業計画及び予算案が提出され、今年度の活動としては、慣例の親睦会と初乗会を開くことに決定。

親睦会は十二月十二日に東京観光ホテル（品川）にて、初乗会は一月十五日に、馬車公苑で開く予定にした。予算案については、今までの馬料、馬匹、指導員補助と分けていたものを、現役補助と一括することにしたあとは、現役にて適当に、使用することにし、全員、これを承、終つて今回初めて団体出場することになった現役部員、並びに、平木コ・チの健闘を祈つて会を終つた。

	36年度予算	決 算	37年度予鼻案
前年度繰越金	8,679.-	8,679.-	26,387.-
会 費	150,000.-	111,150.-	180,000.-
寄 附	90,000.-	94,000.-	206,387.-
	248,679.-	213,829.-	
行 事 費	40,000.-	33,700.-	40,000.-
会 合 費	5,000.-	5,250.-	5,000.-
通 信 交 通	15,000.-	14,630.-	15,000.-
馬糧費補助	50,000.-	10,000.-	120,000.-
馬 匹 補 助	70,000.-	64,000.-	
指導員補助	58,000.-	58,000.-	
雑 費	5,000.-	1,862.-	5,000.-
	241000.-	187,442.-	いななき 15,000.-

緑 鞍 会 報 告

38年1月20日現在

摘 要	収 入	支 出	摘 要
緑 鞍 会 費	106,000-	37,000-	行 事、費
初 乗 会 寄 附	3,000-	2,800-	会 合 費
前年度 繰越金	13,000-	11,525-	通 信 交 通 費
		55,000-	指 導 費
		5,500-	緑鞍会名簿
		2,740-	雑 費
	122,000-	114,565-	

残高 7,435 -

B B 会 紹 介

学生時代固い友情に結ばれていたとしても、いざ卒業

して社会に巣立つと、お互いの環境や色々な社会的条件などにより、だんだん疎遠になってしまつのが常である。

しかし、青年時代に芽生えた友情は純粹なものであり、もつと大切に育てあげなくてはならない。そして、我々が年老いていくに従がい、青春の思い出はその人の心に大きな部分を占め、学生時代に、苦勞や悲しみ又は親しみや喜びを共にした同志と、互いに語り合うことは、若返りの妙薬となることであろう。

この様な事を考えて誕生したのが、我が甲会であります。正式の名称は、BLACK BOOTS CLUBと申してチト洒落てはいるが、もともとこの会のメンバーは一癖も二癖もある連中のこととて、集まればBOOBOO（ブーパー）勝手な理屈を述べ立てるものだから、その頭文字B、Bを拝借したにすぎない。ここで会則なるものを抜粋してみましよう。

一条 本会は、青山学院大学馬術部の発展に寄与す

ると共に、昭和三十六年度卒業生の親睦を深め、

永遠の友情を維持することを目的とする。

六条 本会は、三十六年度卒業生により構成される

ものであるが、会員の推挙により特別会員の入会を妨げない。

八条 本会は、脱会を認めず、終生会員とし、全会

員の死亡により自然消滅する。

まあザットこんなものだが、主旨はお解りになりましてたかな？まだ誕生して間もない故、目ぼしい活動はしておりませんが、去る二月二十二日発会式なるものを行ない、大いに気炎をあげ、又、その後箱根に遊山と洒落込んで我々の友情を再確認した次第。

尚、初代会長に神藤重光君、副会長に菊地由美子さんを決定し、土田先生を顧問に戴き一同張り切っております。又、皆様方で入会希望者がありましたら会員に御相談下さい。

（飯 田 記）

成長しつつある

高等部馬術同好会

田・坂 信

高等部の馬術同好会が、今年四月に大学馬術部御協力の元、高等部馬術同好者の諸君等の手によつて復活された事は、皆さん御承知の事と思ひます。元来高等部馬術部は歴史も古く、関東高校馬術トーナメントに於ても準優勝の経験を持ち、又高校馬術界に於ても一馬術部だった事は一言つまでもありません。しかしその馬術部にも一時の沈滞の時期があつた事陰せない事実であります。それは三年前の部員不足に始まり、一昨年には、女子二、三名のみになり、顧問松本先生の御努力もむなしく、同好会になり、それも名ばかりとなつて殆んど無活動の状態で今年にいたりました。しかしその時代にある馬術部の復興を夢見た何人かの、先輩がいた事は想像出来る所であります。そして現在その諸先輩の志を受け継いだ我々十六名の部員が、復興を続けているのであります。

さて我が馬術部同好会の活動状況であります。

四月二十二日 国体高校貸与馬予選一名出場

七月十三日

遠乗り (御殿場)

七月三十一日～八月十六日 綱島での練習

八月六日～十一日 強化練習

九月十四日 関東高校馬術連盟加盟

九月十六日 遠乗り

十月一日 対成城戦(於成城馬場) 四名戦

十月十九日 対青字大二部戦(於清風会) 五名戦

十月二十六日 対教大附属高戦(於清風会) 五名戦

十一月二、三日 高等部文化祭 (展示)

十二月十六日～二十七日 強化練習

十二月二十八日～三十日 関東高校馬術トーナメント

以上上げた様に今年一年だけでも、これだけの実績を上げています。特托関東高校馬術連盟への第十四校目としての加盟は、我が馬術同好会にとつて大きな出来事であつたばかりでなく、高等部に於ても、部昇格への可能性を大にしました。又九月二十九日には、馬連主催で青山学院高等部加盟記念の観迎会を開いていただき、現在加盟している、学習院、慶応日吉、慶応志木、成城学園、早稲田学院、農大附属、成践、日大附属桜ヶ丘、法政二高、農芸高校、駒場学園、教大附属、聖橋高校、以上十三校の主だった面々が集り、青山学院の加盟を祝していただきました。又我々が各校の馬術部部員に親しみを感

じ、それと同時に「やるぞ！」というファイトがわいたのもこの時でした。

二番目に上げられるのは、十月中に行った三回の試合でしょう。

対成城戦	-584	成城	741	青学	×
対青学大二部新人戦	430	高等部	452	一部	×
対数大附属高戦	-416	教大附属	-586	青学	×

第一戦の対成城戦は、クラブにとっても、又我々にとっても初めての試合だったので、皆少し上りぎみでありましたが、皆自分の力を出した良い試合でした。しかし使用馬が全部成城の馬とはいえ、試合のかけひきなどの面で未熟さが感じられ、又学んだ点も多い試合でした。第二戦は、成城戦で学んだ点を發揮した快心の試合であったばかりでなく、部員の士気を上げた試合でもありました。しかしここまでは、意外に調子良く来たのですが、対教大附属戦では、相手校が清風会で練習している等の理由もあって、敗退しました。そして部員一同これを苦い経験として、次の試合にこの経験から得たことを生かそうとしています。

三番目は、十二月のトーナメントですが、これは我々

にとつて初めての公式戦であり、又関東高校馬術界に於て最も大事な試合でもあります。十二月二十八日の第一戦の相手校もすでに学習院高等科に決まり、全員必勝を期して練習しています。

そして四月の七名から二部以上の十六名へとふくれ上つた部員と、過去七年間顧問をしてくださっている松本先生とを擁している高等部馬術同好会は、限りなく前進する事でしょう。

高等部に御在学中、馬術部に入つていらした先輩方は、なるべく早く田坂に御連絡ください。

連絡先

都内目黒区下目黒三ノ四九八 田坂 信

馬 匹 報 告

青 慧 号	青 光 号	出 厩 馬 匹	雷 神 号	青 藤 号	青 武 号	青 扇 号	青 潮 号	青 渚 号	月 雪 号	現 在 馬 匹
8 才	11 才		6 才	9 才	5 才	12 才	5 才	10 才	15 才	年 令
鹿 毛	鹿 毛		朽 栗 毛	鹿 毛	鹿 毛	栗 毛	青 毛	栗 毛	尾 花 栗 毛	毛
昭 和 37 ・ 11	昭 和 37 ・ 11	山 厩 年 月 日	昭 和 37 ・ 11	昭 和 37 ・ 11	昭 和 36 ・ 11	昭 和 37 ・ 11	昭 和 37 ・ 11	昭 和 35 ・ 6	昭 和 35 ・ 5	入 曆 年 月 日
廐 馬	廐 馬		宮 城 県	宮 城 県	阪 神 競 馬 場	宮 城 県	水 沢	水 沢	関 西 学 院 大 学	備 考

先輩 寄稿

『いろんな奴』

(事実に基かず)

蓬のない奴

コーヒー以外に又出してもラーメン程度の先輩の
O・B係を担当した奴

ノイローゼになった奴

注意もしないのに馬上で・驚く程の良い返事をす
る奴

気にさわる奴

号令が聞えぬふりをして、駄足をしつばなしの奴

人の良い奴

馬の尻に驚いて赤い顔して、馬の腹をさする奴

馬に嫌られる奴

馬の餌にとくれたパンクツを・吾待てりとポリ

ポリ喰ってしまふ奴

馬に好かれる奴

燕麦を一桮か二桮が分らなくなり、倍も入れて・

その果てに二度も手入をやってしまふ奴

先の見通しのきかない奴

女子部員をものに出来ず・馬並な女をめとつた奴

要領のいゝ奴

蹬上げの猛練習中力尽きたかの如く、しかも大
げさに落馬する奴

要領の悪い奴

監督のニキビ顔に恐れをなしてか、用をたさず
に蹬上で油汗を出し放しの奴

ちよつとおかしな奴

女子のキロツトを平気でしかも注意しても決し
て脱が覆い奴

意地の悪い奴

落馬させられた腹いせに・塩を一升もくれてし
まう奴

豚田さんと芯子さん

菅原 紀美枝

（昭和三五年短卒）

豚田さんは金魚学者である。現在の大学教授の仕事も最初は動物学研究室で金魚と一緒にの生活から展開したことでだ。

金魚年生まれ・という事はないけれども、何故か幼少の頃から金魚の飼育観察にだけは熱が入り、長じて今はそれで御飯を食べている。逆に言えば金魚に養なつて貰っているわけだが、それだから丁寧に扱かうという程のことはなく、同じ魚で食われぬ事はない筈と、白い腹を見せて水面に浮いた金魚を即刻に三枚におろして（むしろような手付きだが）仲間に提供し、追善供養だからつき合えと強要（？）する。勿論ご本尊は平気な顔で食して不審そうな顔もしない。又、蛇にも錦蛇があるのに「鑑賞用」と立派にレットテルを貼られた金魚に赤と黒の出目しかないというのは佻しすぎるの思い立ちから、数年来ずうつと青い金魚を人工交配せんと苦心しているのだが、天の思し召しは金魚にはあの朱色の鱗が一番ふさわしいというのか、今だに金色に底光りする青い金魚

という彼の夢は実を結んで居らぬらしい。

豚田信造は北海道釧路平原の開拓者の子として生まれた。兄達は父の仕事を継いで北海道の農場をやっているが、彼は気が付いせら金魚に引かれて学者の卵となっていた。

大学は東京にある。けれども彼はこの大都会が住み辛くて堪まらないと、よくこぼす。大都会の非を弁じ出すと、日頃の無口が人の変つたように熱を帯び、東京のどこが良くてこんをに集まり群がるのか、田園の良さが分らないのか、歯車の一つになって振り廻されて、それでおしまいになつても構わないのか……。

そして最後は、豚田さん自身が東京の人口の一人だと宥められて幕、という段取りが繰返される。

研究に行き詰ると北海道の牧場が恋しく想われ、それは次第に頭を擡げて来て、自分の塊がその懐へ戻つて行くような、一種の幻覚の如き感情の波となつて襲つて来る。ひどくやりきれない。始末の悪いものなのに、その中で酔っていた気持もどこかにある。それが引潮のように静まつていくと、（俺は東京なんて大嫌いだ。ただ）どあのまゝ北海道の親父の元を離れずに居たら、故郷と

いうものは俺の心の中に根を下ろさなかっただろうな）
しゅんとなってそんな事を考える。

豚田さんの前に、或る日一人の女の人が姿を現わした。彼は母校山岳部会会の幹事をやっていて、山歩きは年期が入っている。歩き廻った山の数の記録よりも、沈着で、足元の確かな技術が、登山家達の間にも高く買われていた。

雑誌社から来たその女の人は、彼に山の記事を是非書いてくれと頼んだ。はじめ断っていたら、これは私の仕事で、これをやらないと帰れないのだから、金魚でも見せて貰い乍ら貴方の気が変わるのを待ちましよう。にこにこしながらも引退らぬ態度をチラと見せて、豚田さんは一週間という期間でその約束を果たすことになってしまった。

そこまではいい。それから先がどこでどうなったものか、三ヶ月後には有路芯子というその女の人は豚田と姓が変わっていたのだから。この豚田氏、全くとんだ芸当をしでかしたものと、友達は皆目を丸くした。

何年も何年も経って、照れ臭いという感覚を失ったかのような頃になって、芯子夫人の口から聞いたのでは

一切の事の運びは豚田さんの活躍の賜物なのだそう。原稿の依頼がきつかけで話し合ってるうちに、芯子さんがやはり北国の生まれで、

冬は雪深く

春は土の匂いの生暖かな

夏は太陽が隅なく野畑を照りわたし、

秋は山の小鳥達が麓まで遊びにやってくる。

ふるさとに育ったという事、その所為か、大学では馬に乗ってたという事、そんな事を話し合ってるうちに、芯子さんの持つてるものが、豚田さんの中の野性に通じる或る物に触れたのではなからうか、亦芯子さんも、ポサつとしているようでキラつと光る彼の深い目に、何かあると直感し、結局二人は夫と妻とになって一緒に歩き出したというわけである。

岩手は芯子さんの郷里である。それで新婚旅行は早池峰山に登るといふ彼の至上命令で二人は其処へ向った。車中でも二人は考える事が有り過ぎて余り多くを語らず登る時にも、黙々と、芯子さんは一心にダソナさまの後に就いて、上へ上へと歩を固め進んで行った。

そして……

早池峰山の頂上で、日の出を仰ぎ乍ら慎しく傍に寄り添

って感激に物も言えずにいる芯子さんに、豚田さんは言ったという。

「今日いずから、キサマはオレのカミさんだ。いいかそれだけでいい。それだけを覚えておくんだ……わかるか」と。

麓で、「サ、行くぞ、ついて来いよ」と言っただけ、殆んど言葉もなく通して、山の天辺で雲海の果てに雄々しく昇る日輪を見つめながら、そう言ったというのだ。「……わかるか」と芯子さんの方へ顔を向けたら、ポロポロ涙を漣してコックンと頷いたつくと、やはりこれもずつと後で、豚田さんが話の序にゆっくりゆっくり噛みしめるように語っていたことである。

芯子さんという人は、その名の通りの人という感じを周囲に与える。雑誌社で仕事をしていた時も、自分の仕事を残して帰ると夕飯が不味いと言い、手が空いていれば何の抵抗もなしにお茶を汲んで廻す。女という或る種の特権めいた胡麻化しに甘えてるなんてのは女の誇りを持ったぬ者のする事だと思ってるし、私は女だ……という意識を持つ場を心得て、それに依って行動するのが本当だと、考える。横の関係を持つ仕事場に居る限り、「女

だから」と仕事の過失を見逃したりする事があれば、本人の彼女が反対に腹を立て、女と男の力が同じ程度のものとは決して思わないが、仕事の上での過ちを女という事で処理され、女という自意識で言い分けを作るのは通用しないではないか、と腰を低くして主張する。

その代り自分には無理と思う場には、始めから顔を出さない。

こういふのは育ちの環境・性分が形づくるのであろうが馬と暮してる数年間が、何時の間にか芯子さんの骨っぽい性格に拍車をかけ、ガツリ固めてしまったものらしい。

乗るだけ乗って仕末が済めば、同僚達への愛想もなく何時の間にか消えてしまう。馬に乗ってる間は物も言わない。障碍でしくじり続けたって、乗りこなせない自分に落度があるので、馬の調子が悪くても一度その背に股がった以上は乗り手に責任があるというふうに決め込んでるから、号令がかゝって練習が終りになっても馬の話は自然口にしなない。

その考え方に間違いはないと思うが、馬に乗って、馬・馬で日を暮して、物の考え方が凡て馬乗りを基調としていて、乗るからには気をゆるめられないとなると、

女の子として大事な何かが失せて行きはしないだろうかとの自分への問いかけが終始ついてまわっていたものだ。芯子さんの思つには、「いずれは私も誰かのオクサンになる」。その時になって悲しい後悔をしないように、馬に乗つてゐる事が自分の為にはなつてもダソナさまの嘆きとならぬように、肝に銘じておきたい。という事だつた。今になれば、あれで良かったのだと思うだけ。

ひどく当り前の事なのだけれども、男の人又女の人に、先天的に与えられた夫々の本性というものが備わつてゐるのではないかしら。それがどんなはずみに表われるかは人に依るけども、お互いに相手の性格の理解と同時に、その事を認め合う努力も欠かされぬと思つてゐる。自然の靈は、初めから「男」と「女」をこの世に送り出した。どういつつもりなのかは分らぬが、それ故にこの世の面白さが生じて来ているのは否めない。

芯子さんは妻という立場になつてから、夫である豚田さんの中に、心臓を突かれる程に女には有り得ぬ男そのものを感じる瞬間もあるし、逆に、自分にもこんなものが潜んでたのかと驚いた事もある。一寸の事なのに……

拙文ではその心理の措き写しは手掛けれぬが、豚田さんが、一献傾けてるのを見ると、その気になつて三味線を取り出し、邪魔にならぬように、ダソナ様の好きな新内をひいたりする時もあるし、生けた花がたとえツヤンとしていても、七日と目の前に飾られてる事もないよう心配するし、豚田さんの着物は自分の手で縫つて紬を通して貰つた。

芯子さんは、「良い奥さん」になりたいとは思つていない。その代り、夫に不自由をかけないで、そして邪魔にもならぬ、そうなりたいと常々心のすみに願つてゐる。しとやかさおとなしき、それだけで、女のすべてではない筈だ。「女の根性」、そんなものがきつとある。

有ると思つけれども、女の人の独走ではそれは意地になり、男の人の本性（価値）を認めた上でこそ、身につくものではないかしら。芯子さんは、それを探りあてようとしてゐるのかもしれない。

豚田さんが芯子さんをお嫁にもらつてからもう三十年二人は目に見えぬ織で結ばれてでもゐるように、一つになつて暮して来た。魂と魂の触れ合い、通し合いを何よりも大事にしてきたゆえんである。生涯を共にするとなれば、仲を睦まじく保つてゆくには、努力、努力と

それだけで片づくものではないという気がする。もつと以前の、要素の問題に何よりも大きく起因するであろう。三十年の年月を、楽しく悔いなく過すのは、容易なことではない。豚田さんは、「波風もあつたでしょう」と問われれば、波とは何だ、風とは何だと反対に聞き返す。山あり野ありの一本道を淡々と歩いている、歩きたい、それでいいのだ、その上に何で波や風というものがあるうや。苦勞を感じ、貧乏を嘆けば、波風もどんなに大きく、身に伝えようが、わしらは何事も当り前、凡てこの世は、当り前のことばかりというのか、感じませんや。鈍いんじゃないや。ワツハツハ……と大笑いして話はおしまいになってしまふ。

豚田さんは芯子夫人に岩手の山のテッペンで「俺の女房である。このことだけを覚えておけ」と宣告しておきをがら、その後一変も、「よくやった」ともいわぬし、反対に「出て行け」ともいったことがない。きつと彼と彼女はお墓の中まで行つても一緒なのだろう。それも一人の生活の中で、すでに默契が出来てるのかもしれない。と私は一人ぎめして、うらやましがっている。

昭和二十八年といえ、もう丁度、十年の昔、そのころ部誌をつくるつという声がちよと上がったのだ。そうです。当時の現役の方々が持ちよられた原稿が発行されることなく、コーチの平木さんの所に保存されてありました。現在、北海道におられる田の植松さんが集められたそうで、お話ししましたところ、心よく御承諾下さいましたので、ここにそのなつかしい原稿のいくつかを、のせて当時をしのびたいと思います。

お葉書有難う。馬の世話をしながら、学生生活を送られる諸君を想い常々最大限の称賛と発展を、心から祈っています。

可愛い仔馬から、老いてその生涯をわらの上に閉じるまで、しみじみ径験したのも始めは学生時代の乗馬部生活でした。当時は、乗馬隊と貸馬で、練習したもので皆真険にやったものです。くせ馬が多く、仲々苦心しました。石田・山口・和久井氏等の先輩や、東条、伊藤君等の闘将が点をかせいでくれた様に思います。小生は同期に一人も相棒がなく、閉口したものです。然し夏期合宿や、久地海林辺への遠乗に十五・六騎でいくのは、実

に愉快でした。戦時は、馬車将校として、満蒙の野を疾駆したものです。戦災で疎開、戦後、再び洋装店を経営現在に至る。乞判読

昭和二十七年二月一日

鎌田和正

〔昭和九年商卒〕

植松英二様

脇坂達雄〔昭和一五年卒〕

前略 馬術部々誌創刊との報に接し、私もOBの一員として非常に嬉しく思う者の一人です。私の学生時代〔昭和十一年～十五年〕は馬術部生活を除いたら何も残らないと俥う程その想い出は尽きないものです。又あの生涯忘れる事の出来ない四ヶ年のシペリヤ捕虜生活に於ても、愉快であつた馬術部生活を回想することは私の樂の一つとなつておつたものでした。又駒沢陸上の練習或は關西北陸遠征對抗試合等色々ありますがどの程度の部誌か、はつきりわかりませんので、今回は唯一つのこと

を現部員、諸兄に報告いたします。其れは私の学生時代或は、OBになつてからでも、常に積極的に援助され、又常に、部に対して変らぬ愛着を持つておられた処の二人の先輩、当時山武商会の山口氏〔昭和七・八年？卒〕及び、住友金属の伊藤氏〔昭和十四年卒〕が、既に此の世におられない事です。此の御二人の方こそ、現在健在であつたら、必ずやOBの有力メンバーとして、現役諸兄に、色々と、後援の手を差しのべて呉れるだるう事は疑う余地がありません。其れを考えると、私は残念でたまりませんが、この様な方がおられたという事を現部員に認識して頂き度く今回筆をとつたものです。未だ外に書きたいこともあります。又別の機会に譲り、平素のおおびかたがた昔のすでに亡き先輩を現部員にお知らせするとともに、哀悼の意を表するものです。近い所に居り乍ら、一回も伺わず、誠に申し訳ないと思つておりますが、近いうち、是非行きたいと思つております。今後、ますます部の発展することを祈つてやみません。

回顧と展望

植、松 英 二 (昭和二十八年卒)

……昭和二十五・二十六年年度部活動報告……

当時馬術部が、戦後早くも復活し、その活動を開始したのが、今から七年前の昭和二十二年であった。現在OBとして、御助言をいただいている柿原・賀川両先輩が当時の部員であったと聞く。しかし残念をことに、後継者がないままに、部員卒業と同時に、廃部するという事になった。越えて、昭和二十六年馬術部復興の声があり同好の士が、合して同年四月、馬術部を再復活し、顧問にら鳥居哲先生を挙げ、部員は数名、予算二万五千円を以って、正式に、ここに発足した。

集まった連中は、皆生れて以来まだ馬の背にまたがった経験、皆無、馬も知らなければ、術もさらさら覚えなしという訳で、先づ馬に乗ろうではないかと、大挙して東京代々木クラブに押しかけた。それでも遂には、御殿場に速乗りし富士山麓を自由に疾走する迄には上達した。之が長田氏に厄介になったはじめである。その当時は赤字などは、吾人の知るところではなく、借馬金は一切部費負担であったと記憶する。その時の部員は、早稲田に

入った加藤君、其他出たり、入ったりが、多数いた様に思われるが、現在は沈君を除いては居ない。この年の十一月頃かつて馬術部に属されていたという一人のOBに紹介を受けた。銭高組の細野さんである。かつてのめざましい馬術部の活路を聞き、又OBの多くが、居られるのを知り、目を細くしたり、丸くしたりで、早速紹介されて、一人一人尋ね歩き部再設を連絡、御助力を願って廻つた。二十数年、学院とは音信不通のOBにもめぐり合つて、よろこばれ、よくたづねてきたと、山海の馳走を一人であづかつたのもその頃である。

越えて昭和二十六年、高等部馬術部の猛者中島・宮坂森等を迎え入れ、新さの気を注入した。顧問に鳥居先生部長に植松、予算額三万七千円、部員数十数名、練習用馬は依然として借りうま、代々木クラブに行く度に他大学の自馬訓練を見て、うらやましくてたまらず、脾肉の嘆をかこつていた。

同年六月、我々も一丁、自馬一頭をとの議が起り、話が進んで板妻の長田氏の手を経て「青峰」を遂に購入するに至つた。購入費四万千円、酷暑中、森・宮坂が運搬し、八月十八日、代々木クラブ馬房の一隅に繋留した時は何ともうれしく、眠られない日があつたのは確かであ

った。OBには奉賀帳をまわし、御寄附頂いた額が、二万五千元。しかしこの時以来部の台所は、火の車でこれが今日に至つても、少しも消失されない事になった。當時も、机上では計算されない金がどしどし支出し、その上、借金の返済という重荷を、背負つた訳である。金をあつめてやつと購入した馬料がその日のうちに盗まれ泣くに泣かれぬ思い出もその頃である。一番の財政的ピンチは、暮れとその翌年であつた。借金返済の期日もすでにすぎさり、兎角の援助金も馬に喰われ、予定した金も入らず、長田氏の方からは毎週、催促の手紙はくるし遂には裁判との事になった。この時程「生きる」事が面倒になつた事はない。すんで、自馬を手離すところまでいつたが、十二月借金で借金を清算し得た。この頃、柿原先輩から御叱咤受けたのを今でも身にしてみている。沈・米谷・小池から個人的融資を受け、助かつたことも記憶に新しい。但し一方楽しい回顧も持つている。自馬所有故に、東都馬術連盟に加入が許され、自馬にまたがつて出場した時の気分は又格別であつた。八校中八位の成績ではあつたが……。

第一回OBとの懇親会を同年十月明治製菓の二階で開催し大いに激励され、無暗に感激したこともあつたし、

代々木クラブで品と現役の馬術競度会で、十数年も馬に乗つていない先輩に、勝を制されて、「お前達は何だとハツパをかけられ、「なる程ウメーヤ」と感嘆の声をもらしたのも昨年のも一月であつたか。

同六月馬車二台を幌馬草に見立て、馬七騎に分乗して西部劇よろしく、山中湖に遠乗りし、湖畔にキャンブプイヤーを囲み、馬車の下にもぐり込んで一泊した事も愉快な思い出の一つとなつた。

この外馬事公苑に於けるトーナメントで緒戦に敗退、体育館での一週間にわたる合宿訓練の功なかつたこともあつた。あれやこれやの泣き笑いの多忙な年もすぎたが資金が、絶対額不足なのはいつも同じで亡霊につかれた思いである。馬房代金、一千元也節約の為クラブをオン出で、強引に学院構内に馬を連れ込み、学校側に援助をたのんだのが、昨年のも二月であつた。遂に、藤田組の倉庫を改造して、学内に馬小屋を定めた手練は、誠にアツパレと言つ外はない。これが、引いては、堂々とした馬房建設の動因となつたに及んでは、おしの太さの効力を再認せざるをえない。

昭和二十七年四月、年度は変り、部長を沈に交代、主将堀内、会計小池の陣容を以つて、予算額、三万七千元

卒業生無しのまま、新入部員を迎え入れた。女子部員が多数加わるに至って、俄然部は賑やかさを贈した。日去り月ゆきて、昭和の二十七年を送りここに二十八年の新しい年を迎えた。過ぎし年の馬術部の足跡……いかなる機縁でか各地より、学院に参じ、同好の士が相会して共にしるした足跡……それは各人の脳裡に思い出として、きざみこまれていたものであり、回顧して、この上ない楽しみとなるであろう。部の足跡これは部の歴史でもある。この一年間、我々は歴史生成の一端をになってきたわけで、思えば将来も綿々と連続し反復する歴史ではある。ここに歴史の一駒である活動記録、其の他を止めて後世に資すみのも、あながち、無意味ではなからう。

「俺にもこんを時代があつたか」

「こんな時、あんを奴がいたか」

と回想の種になるのも面白いし、他人の書いたものをみて、彼にもこんな面があつたのかと、お互がよりよく知り得ることにちなれば、なおさらである。と共に、先輩諸氏に対し部の現状を知っていたたくりポートの役も兼ねられよう。こんな所以で部誌を創刊しここに発行する次第だ。毎年少くとも一回我が馬術部の「跡」を残していききたいものだ。

沈 迺 浜（昭和二十八年卒）

昭和二十八年度第一回のミーティングをかねて一月十八日に日本大学馬場に於て初乗会を開催した。多数の先輩の集りを期待したが御出で下さつたのは青木真次先輩以下脇坂・青木（昇）・阿部・賀川の諸先輩並びに高等部出身の早川氏のみさびしさであつた。土田顧問教授の挨拶の後OB対現役の試合が行なわれた。雪辱の意気にもえる現役は新人の活躍も及ばず先輩各位の昔とつた杵柄の前に屈し大量一三〇点余の差をもつてOBに二連覇の功をなさしめた。その後は、ハン食で魚釣り等があり先輩も日頃の苦虫を開放して小供の如くに一つのバンに飛びつかれた。審査席よりこの競技の一等には腹の薬、勿論体を思つての親心である。（本当は金窮りか？）最後に全員参加の中障碍個人戦は公平に馬は抽せんによつてふりあてられた。第一組は藤根君、（現役一年）が堂々先輩をおさえて優勝第二組では賀川先輩が優勝しそれぞれ賞品のアルバムを獲得し楽しき一日が過ぎされた。この会で感ぜられた事は先輩各位の乗馬振りであり、さすがにと感心せられるものがあつた。

我々現役もこれにまけない様練習したいと思つ。

「落馬」

宮坂 悠 二（昭和三〇年卒）

今迄十数回落馬した。落馬なしに馬に乗りたいたなんて虫が長すぎる。まったく落馬なくして、馬術なしである。落馬は何故するのか。私が考えるには、原因は二つある。一つは騎手の責任である。大部分・落馬はこれが原因である。他は騎手にはなすことの出来ない原因で・馬具の不備・馬の事故等であるが、これも、騎手の注意で軽減出来る筈である。

私が始めて落馬したのは、二十五年十一月であり、これより現在まで私の落馬は続いている。落馬で一番ひどい目に逢つたのは、二十七年の四月に馬事公苑で行われたトーナメントに於てであった。城天と云うすごい馬にふりまわされて、最後の障碍のすぐ前であえなくドタリと落ち、障碍の全身に頭でキッスしてしまった。当然の結果として出血。出場を取り消され、代行としてSさんに出てもらった。この時の傷は三針縫つた。この傷は一生頭に残るであらう。自己の技術を自己以上に過信した馬鹿者の紋章として。

続けさまに落馬したのは、巻島先輩（昭和十八年富士銀行）に、しばらくの時で、十分位に、五・六回落ちた。二分に一回の割合である。最後に落ちた時には、「助かった」と言つたような氣になつて、馬場に大の字になつて空を見ていた。青い・真青な空であつた。これより後、巻島先輩の顔を見ると、すぐに、落馬が思い出され、続いて、あの時の青い空が連想される。

今年のリーグ戦でも落馬した。四日目の対中央戦の時、シェパードと、馬のあいの子みたいな馬に乗つた時、第七番目の障碍を左に切つた。切つて馬は、すつとんでいつて、らちにぶつかつてしまった。乗つてた私はその反動で、前になげ出されかけ、あわてて、らちにつかまつてしまった。これは規則から見たら、完全な落馬であり、十点マイナスである。試合後なんであんなことをしたと言われたが人情として、あの場合は、誰でもらちにつかまるにきまつてる。でないと又・トーナメントの時みたいに、頭を切つたかもしれない。

今度のリーグ戦位、落馬の多い試合はなかつた。全期を通じて延二十六人。内本学院関係は三人である。農工大の星範号は必ず第九障碍の前で、首を下げ、急にとまるのでここで騎乗者の大部分は落馬した。まったくい

やなつき合いにくい馬である。

落馬した時には「畜生」「痛い」と思ったりするが、後になって考える時、落馬はなつかしい思い出になり、それは益々私と馬の仲を離れないものにして行く。

とにかく私は今後、乗馬を続ける限り、大なり、小なり種々の形で落馬するであろう私は落馬を何とも思わない。学年試験や、就職試験から落ちる方が、よっぽど恐ろしい。

一九五二年十二月二十一日

青山学院学生となるまで

米谷浩志（昭和三十一年卒）

僕は昭和二十六年の二月に受験のため東京に来て以来一年と十ヶ月位になるが、其の間に六回も宿先を変っている。これは絶体に自慢にもならないことで、今ここに至って思い出してみて驚きの外はない。

東京に来て一番初めに落着いたところが、品川から出ている京浜急行に乗り、北品川という駅で降りて二、三分の所であった。そこは夜の灯ともし頃ともなると、夜

の女にはあらず（と思う）バーヤ・カフェーの女給連が赤青等のネオンの下に立って、野郎だとみると一応誰でもかまわずに寄添ってくれるといった様な、僕達みたいな純真な青年には、甚だ薄気味悪いところであった。

僕が夜の八時に東京駅のプラットホームに足を踏降りした日は、東京でも珍らしいという大雪の翌日であった。その時は姉さんに迎えに来て呉れと電報で通知しておいたのだが、どんな不都合が起つたのか姉さんは来てくれず、姉さんの下宿先の叔母さんという人が迎えに来てくれた。（姉は僕より以前に昭和二十五年九月頃から東京に来ていた。）僕はもし姉さんが来なくても住所位は一人ですぐ探してみせるよ、といった様なのんきな調子で東京駅に汽革と共にすべり込んだのであるが、窓から首を出して姉さんを探したけれど、何処にも見当らずその中に、一緒に来た友達は自分の家の人達に伴われて帰ってしまうし内心はなんだか変に心細くなっていたのである。僕は人蔭もまばらたなつたホームでその叔母さんに「浩志さん」と声を掛けられた時真に全身で安心の吐息をもらした位嬉しかった。

それから叔母さんに従って北品川の家まで案内されたわけだが電車に三つも四つも乗り替えた様な感じだけし

が残っていない。丸々と肥った叔母さんの後姿と道端に寄せ集められた雪だけが妙に印象的であつた。この道順は後になつて理解することが出来た。

さて家に着いて僕の部屋（姉さんの部屋なのだが）に案内されてみると、僕のだといふベッドに、年の頃二十前後の娘が寝ているのには驚いた。僕が来たのを見てすぐに出ては行つたけれども。

そこには三、四世帯の人が生活していた。一心皆んなに紹介されて色々なことを聞かれ又聞いたりしたが僕の言葉に田舎訛がないと云われた時は少なからず鼻が高くなつた。しかしその高くなつた鼻も一時間後にはベシヤンコになつてしまつた。それはそのもう一人の娘に案内され風呂に行つたのがそもそも間違ひで途中にその娘に話しかけた言葉が全々通じていないということである。こちらは通じるものだと思ひ込んで話しかけていたのに、あゝ十八の田舎青年よ憐れなるかなである。

明けてその翌日から受験勉強と極めこめば良かったんだが姉さんに連れられて東京見物と来たから仕末が悪い。親様が大切な息子を手離すのに御思慮遊ばすのも無理からぬことである。知らない土地をあつちこつちと引づり廻されあゝ、目の保養になつた事と考えながら疲れた足

を引きつづつて家に帰りその夜は熟睡するといつた調子だつた。しかし試験がせまつて来ると僕も心配になりだし姉の意見もあつて勉強を始めたのが試験開始の六日前の暁から、それから三日三晩、後で考えても驚く程一心不乱に勉強した。御陰で無事に合格出来たし後の青山学院の試験にも合格出来たのであろう。しかしそれよりも僕が一番嬉しかつたのは北品川と三との間の道を完全に覚えたことだつた。勿論以前国体で東京に来たことがあつたので（その時は池袋のある宿に泊つた）池袋の駅附近は少々知つていたし田舎者は必ず一辺は行く銀座八町と浅草の六区附近とはおぼろながら知つてはいたが、その時は、東京で迷子になつても絶対に驚かない等と思つたものだつた。ところがその後姉さんと一緒に田村町交叉点にあるロージャスという店に行つた時、ちよつと買物するからその附近をぶらぶらして来なさいよ、といわれてもそれを承諾したもののその店の前から一步も動けなかつたというのだから愉快である。

それから二・三日の間北品川の附近をぶらぶらして、その附近の地理には明るくなつた。しかし僕はどこか間が抜けているとみえ、泉岳寺にはついに詣でなかつた。後になつて北品川にいたのなら泉岳寺には詣でたでしよ

うと聞かれて返事に困り、何辺も頭をかいてごまかしたかわからない。僕等のいた部屋（家も同様）はすくみすばらしい所で東京にもこんを所があるのかと思われる位であった。姉さんは時々その家を出て他の良い所に行く様なことを云っていたが、ついに三月一日にその部屋を引き払って渋谷の代官山の或る家に移った。この家は家政婦会という看板が挙げてあつたがその家の中に、家政婦の人達も数人居り二・三世帯に部屋を貸してあるといつたところで家の構えも割合に大きかつた。僕達の借りた部屋は元応接間だつたという部屋で日当りの良い綺麗な部屋だつたので我々の気に入つた。その部屋に到着して間もない或る日僕の友達が尋ねて来て学院に願書を出さないかと誘われ、締切の二日前に学院の事務局に願書を出しに行った。代官山駅から東横線に乗って渋谷に出てそれから都電に乗って車庫前で降車し、学院まで行つたのだから今考えてみると実に馬鹿馬鹿しいことである。その後査査中終始そのコースを通つたのである。

試験も無事に終つて入学出来るという事も明白になつた日心のゆとりも出来たので、学院の堀の大きな道路は何処に通じるのか行つてみようと思ひ立つた。さて行つて見ると、どうも見馴れた様な所に漸次近づくのである。

あれ変だなと思ひ立止まつてふと左側の路地を見るとこれが自分の借りている家の前の路地なのである。なる程見馴れた様な道である事はあたり前である。帰つてからすぐ姉さんに向つて大威張でこの事を告げたことはいうまでもない。それから渋谷駅前に出る道も覚えだし、パチンコ屋も教えて貰つた。

僕は此の様にして東京になじみ、東京への第一歩を踏み出したのである。（事實は第二步だが）

さてこの時の最後にぶつかつたのが^三に入学するか、学院に入学するかという問題である。僕もその当時は高校時代の怠慢を取戻すため一応は向学心に燃えていたので^三の方に入学して自分の向学心を満足させようと思つたのである。姉さんも大いに賛成してくれた。僕がハンドボールばかり熱中して勉強の“べ”の字とも縁切りになつた当時の様子を心ひそかに心配していた母上様は、なおさらのこと大賛成であつた。僕も大いに満足だつた。しかしこの時の決断が、僕の運命を左右する分岐点であつたであろう。もし後年になつて^三に行つてりや良かつた事と思つ時がない様に人間の男となる為の道を学ぼうと思つている。

四月の何日だつたか忘れたが入学式も始業式も無事に

終えいやらしい単位も取得決意して学院大学生としての生活が始まったのである。

： オワリ ：

編集後記

長い間・休刊となっていました「いななき」を皆様の御協力により・ここに年ぶりに発行することが出来ました。

編集などまったく未経験で、どう整理していいやらわからず・雑然となつてしまいましたが一通り終つて、何かホツといたしました。ただ一年余りの試合の記録がそろわず・掲載することが、出来ませんでした。今となって、一番気がかりですし、申し訳なく思っております。

うれしかったことは、今回先輩の方々に、現役時代に書かれたという十年も昔の原稿をいただいたことです。もう破れかけた用紙のインクも色あせてしまった文字の中に、まだお目にかかったこともない先輩や、今はすっかり社会人となつてしまわれた方々の、なつかしい現役時代を想像させていただき、年月こそ流れ、環境こそ変

つても、馬と共に味わう苦しみや、喜びはいつの時代も変わらないことを感じ勇気づけられる思いでした。今後もよろしくお願ひします。

「いななき五号」

昭和三十八年二月十日発行

発行所 東京都渋谷区緑岡二二

青山学院大学馬術部

代表者 伊藤正昭

編集責任者 伊沢東美

印刷所 (有)平文社

千代田区神田神保町3ノ13

(332)六四九三 (301)一七六九

青山学院御用

徽章・カップ
トロフィー 卒業記念品の

御注文は

TEL (401) 2389

富士徽章製作所へ

青山学院正門前

馬具の井川

最古の歴史・最新の技術・最上の品質

東京都文京区駒込蓬来町5番地

井川商会

電話駒込 (821) 2565

乗馬服・乗馬ズボンの御用命は ……

畑中洋服店へ

府中市6291 TEL(0236)2812